

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381217

研究課題名(和文)ユニバーサルデザインの視点を取り入れた小学校家庭科授業の構想

研究課題名(英文)Lessons with Universal Design In Elementary School's Home Economics

研究代表者

小島 郷子(KOJIMA, KYOKO)

高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・教授

研究者番号：20225428

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、小学校家庭科における授業を、ユニバーサルデザインの考え方を取り入れて、「全ての子どもが安心して参加できる授業」に改善しようとするものである。ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりのためには、授業構成の工夫、情報伝達の工夫そして、一人ひとりの学びへの対応が必要であることが確認された。また、そのためにはICT機器を活用することが有効であることが示唆された。授業において教師及び児童生徒がICT活用の効果を高めるためには、環境整備のみならず、情報セキュリティの確保に配慮することが重要であることが示唆された。得られた知見をもとに、小学校家庭科授業を構想した。

研究成果の概要(英文)：I adopt a way of thinking of the universal design, and this study is going to improve a class in the elementary school home economics for "the class that all children can participate in in peace". For the making of class that adopted a viewpoint of the universal design, a device to design a class was necessary, and the device to conveyed information was necessary and it was confirmed that correspondence to each person's learning was necessary. I designed the class of the elementary school home economics based on a result

研究分野：家庭科教育学

キーワード：ユニバーサルデザイン 小学校 家庭科 ICT活用 授業改善

## 1. 研究開始当初の背景

各教科における授業研究、授業改善は学校教育における必須課題であり、「授業」への関心は高い。授業分析や授業改善に関する代表著作としては、佐伯胖・大村彰道・藤岡信勝・汐見稔幸『すぐれた授業とはなにか』(東京大学出版会、1990)、日比裕・的場正美『授業分析の方法と課題』(黎明書房、2001)、佐藤学『教育方法学』(岩波書店、1999)、田島薫『授業改善のための授業分析の手順と考え方』(黎明書房、2001)など多数ある。

ユニバーサルの考え方は、日本では特別支援教育において一般化しており研究成果も多く認められるが、普通教科の授業をデザインする際に、ユニバーサルの視点を取り入れた授業づくりや授業改善の視点は見られない。

一方国外においては、教育のユニバーサルデザイン化は、ノースカロライナ大学、ウィスコンシン大学、マサチューセッツ州にあるCAST (Center for Applied Special Technology ユニバーサルデザインの原理を通しての教育改善を目的としたプログラムを実施している組織)を中心に研究が進んでいる。代表著作には、Edited by David H. Rose and Anne Meyer『A Practical Reader in Universal Design for Learning』(Harvard Education Press, 2006)、David H. Rose『The Universally Designed Classroom : Accessible Curriculum And Digital Technologies (Paperback)』(Harvard Education Press, 2005)がある。これらの研究成果は、本研究の参考になるものである。

本研究は、これらの先行研究の成果を参照しながら、小学校における消費者教育の授業を、すべての子どもが安心して参加することができ、わかる・できる授業へ改善するための方法論( ICT 活用を視野に入れて)を解明するとともに、そこからユニバーサルデザイン化した消費者教育の授業を構築しようと

する先駆的試みとして位置づけられる。

研究代表者は、消費者教育に関する研究を行っており、平成3年度「学校教育における消費者教育の研究」、平成10~11年度「金銭教育の今日的課題と家庭科教育の役割」、平成15~18年度「学校週5日制時代の教科編成を射程に入れた金銭学習プログラム・モジュールの作成」と、科学研究費助成を受けて、消費者教育に関する理論的・実践的な研究を蓄積するなかで、小学校における消費者教育の授業に関する課題に至っている。

一方、授業については評価研究を行っており、「日韓教科教育研究会」のメンバーとして、平成13年~15年度「実技をとまなう教科教育における授業評価システムに関する教科横断的研究」として科学研究費の助成を受けて、地域の実態に即した実技教科(家庭科)の授業評価システムについて検討を行い、家庭科の授業評価票を作成し、学習者に家庭科の授業評価を実施した。その結果、学習者が感じている家庭科の授業実態や教師の指導性、授業評価各項目と授業の総合評価の関係性について明らかにしている。

次に学習方法に関する研究では、教育のICT化に対応するために家庭科授業で活用できるデジタルコンテンツを作成し、それを活用した授業実践を行った(小島郷子、一瀬あかね「家庭科学習のためのデジタル教材開発 - 『危険』をテーマに - 」家庭科教育実践研究誌第6号、pp.21-31、日本家庭科教育学会四国地区会)。その結果、デジタル教材の活用は子どもたちの興味や関心が高まるのみならず、理解が深まり、デジタル教材の有効性を検証することができた。

## 2. 研究の目的

本研究は、これまでの研究成果を統合・発展させ、全ての子どもが安心して授業に参加できる家庭科における消費者教育の授業の創造を目指したい。言語中心の学習方法から

視覚的教材の活用や操作的な活動で授業を展開したり、目や耳に入る授業以外の刺激を抑えた学習環境を整えたり、子どもの興味や関心から題材を構成することが、どの子どもにとっても学習しやすいということになるのではないかと考えた。このことが、家庭科授業のユニバーサルデザイン化ということである。

### 3. 研究の方法

家庭科における消費者教育のユニバーサルデザイン化のめざし、家庭科教育研究における先行研究を踏まえた理論的把握を行う。得られた知見を元に、ユニバーサルデザインの原理を視点にした家庭科授業の構築を行い、特に教授方法の工夫ではICTを活用した教材や教具の開発を行う。

課題 家庭科授業のユニバーサルデザイン化の理論仮説を提出するための理論研究を行う。広くユニバーサルデザイン、授業研究、授業改善等の先行研究を包括的、組織的に検討し、本研究の理論仮説を提出する。

課題 小学校の教科書をユニバーサルデザインの視点から分析を行う。誰もが学びやすい教科書になっているか点検を行う。

課題 ICT活用先進国視察を行う。教育におけるICT活用が先進的である大韓民国の小学校を訪問し、小学校におけるICTの有効的な活用方法について視察を行う。

### 4. 研究成果

学校における授業のユニバーサルデザインとは、特別支援教育の視点を全ての児童生徒の指導に生かすことであり、一人一人の教育的ニーズを把握した適切な教育的支援は、障がいの有無に関わらず、全ての幼児児童生徒の指導においても必要である。

小学校学習指導要領解説総則編 第5節教育課程実施上の配慮事項 3「学級経営と生徒指導の充実」では、「分かる喜びや学ぶ意義

を実感できない授業は児童にとって苦痛であり、児童の劣等意識を助長し情緒の不安定をもたらし、様々な問題行動を生じさせる原因となることも考えられる。」と述べられている。学校におけるユニバーサルデザインの視点はアメリカの建築家であり工業デザイナーでもあったロナルド・メイスらによって提唱された「ユニバーサルデザイン7原則を参考にした。

課題 について、授業を構想する際の観点は以下のことが重要であることが導きだされた。

#### (1) 授業構成の工夫

授業の導入を工夫することで意欲や集中を高める。見通しや手順を示す。授業の流れを一定化する。学習内容を焦点化し、何を学ぶかを明確にする。授業を構造化し、ユニット化や見て理解できる教材や手順業の作成など、視覚的に分かりやすい学習環境を整える。授業の始まりと終わりを明確にする。ペア学習、小グループ学習、全員が考えを伝える工夫で全員が発表する機会を設ける、グループで意見交換をするなど、全員が参加できる質問や活動を設定する。スモールステップで学習する。

#### (2) 情報伝達の工夫

前置きして指示を出す、指示を短く、声のトーンや話のスピードを変化させる等、指示・発問・説明を分かりやすいように工夫する。OKサイン、アイコンタクト、サイレントサイン、ヘルプカード等非言語指示を活用する。ICTの活用、板書の工夫、タイマーの活用、思考の視覚化等視覚的な情報を提示する。

#### (3) 一人ひとりの学びへの対応

複数のプリントの用意、ワークシートやヒントカード、チャレンジ課題の用意、自分の力を発揮して課題を遂行できるような支援を工夫する。複数の段階に分けた課題を用意し、個に応じた課題に取り組む、1つのワークシートの課題数を減らし、個に応じた枚数

のワークシートに取り組む等課題量の調整をする。ヒントカード、友達に教えてもらえる環境、丁寧な机間指導等わからないときに支援を受けることができる。動作化、具体物の活用、視覚情報と聴覚情報の提示、ICTの活用、同時処理と継次処理での提示等学び方の違いへの対応を工夫する。

課題 小学校家庭科教科書分析について。

家庭科教科書をユニバーサルデザインの視点で分析した結果、以下の3点が特に工夫点として明らかになった。

(1)実習が安心・安全に実施できるための工夫 児童が初めて包丁を使う時は緊張することから、不安を取り除くために、実習前に使い方のシミュレーションができるように実物大写真が掲載されている。左利きの児童や特別な支援を要する子どもにも役に立つ内容である。

(2)拡大文字 教科書の本文等の文章に付けられている「ふりがな」は従来は小さくて見にくいものであったが、サイズは同じでもフォントの工夫で読みやすくなっている。

(3)カラーバリアフリーを取り入れている配色およびデザインがカラーバリアフリーになっている。グラフの色だけでなく形も変えてグラフが読みとりやすくなっている。また、白色の縁取りを効果的に使用したり、線を太くしたり、見分けやすい配色の組み合わせを使用するなどの工夫が各所に認められた。

課題 ICT先進国視察について。

教育や授業におけるICT活用が進んでいる大韓民国の小学校を訪問調査し、授業場面でのICTの有効活用について以下の知見を得た。児童の効果的な活用方法として、発表、記録、要約、報告といったといった基礎的・基本的な知識・技能を活用した学習活動において、ICTを活用することでより充実した学習が実

現できる場面が多く認められた。さらに、問題解決や探究活動の過程における、より発展的な学習場面においても、ICTの効果定期的な活用が確認できた。

授業において教師及び児童生徒がICT活用の効果を高めるためには、校内のICT環境の整備を推進し、児童生徒がいつでもICTが活用できる環境を整えておくことや、安心してICTを活用できるように、情報機器にフィルタリング機能の措置を講じたり、情報セキュリティの確保などに十分配慮したりすることが重要であることが確認された。

得られた知見をもとに、小学校家庭科の授業を構想した。今後は、小学校において実践を重ねさらなる改善を加えていきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

1 小島郷子、日本と韓国の児童が捉える家庭科と実科の授業、高知大学教育学部研究報告、第76号、2016年、55-65(査読無)

2 小島郷子、電子黒板を用いた小学校家庭科授業の学習効果、高知大学教育実践研究、第28号、2014年、1-11(査読無)

3 小島郷子、教員養成における実践力育成のための家庭科教育法の授業改善、大学家庭科教育研究会編、家庭科教育研究、第35集、2014年、45-50(査読有)

〔図書〕(計1件)

小島郷子、小学校の実践力を育てる、大学家庭科教育研究会編、市民社会をひらく家庭科、2015年、160-173(査読無)

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

小島 郷子(KOJIMA KYOKO)  
高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・教授  
26381217